

## 藤野先生

魯迅著・竹内好訳『魯迅文集 第二卷』（筑摩書店、一九七六年）より

藤野先生東京も格別のことはなかった。上野の桜が満開のころは、眺めはいかにも紅（くれな）いの薄雲のようではあったが、花の下にはきまって、隊を組んだ「清国留学生」の速成組がいた。頭のとっぺんに辮髪をぐるぐる巻きにし、そのため学生帽が高くそびえて、富士山の恰好をしている。なかには辮髪を解いて平たく巻いたのもあり、帽子を脱ぐと、油でテカテカして、少女の髪にそっくりである。これで首でもひねってみせれば、色気は満点だ。

中国留学生会館の入口の部屋では、本を若干売っていたので、たまには立寄ってみる価値はあった。午前中なら、その内部の二、三の洋間は、そう居心地は悪くなかった。だが夕方になると、一間（ひとま）の床板がきまってトントンと地響きを立て、それに部屋じゆう煙やらほこりやらで濛々となった。消息通にきいてみると「あれはダンスの稽古さ」ということであつた。

ほかの土地へ行ってみたら、どうだろう。

そこで私は、仙台の医学専門学校へ行くことにした。東京を出発して、間もなく、ある駅に着いた。「日暮里（につぼり）」と書いてあつた。なぜか、私はいまだにその名を記憶している。その次は「水戸」をおぼえているだけだ。これは明（みん）の遺民、朱舜水先生が客死された地だ。仙台は市ではあるが、大きくない。冬はひどく寒かつた。中国の学生は、まだいながつた。

おそらく物は稀なるをもつて貴しとするのであろうか。北京の白菜が浙江(せつこう)へ運ばれると、先の赤いヒモで根元をゆわえられ、果物屋の店頭にさかさに吊され、その名も「山東菜」と尊んで呼ばれる。福建に野生する蘆かい(草カンムリ)に、會。ろかい)が北京へ行くと、温室へ招じ入れられて「龍舌蘭」と美称される。私も、仙台へ来てから、ちようどこのような優待を受けた。学校が授業料を免除してくれたばかりでなく、二、三の職員は、私のために食事や住居の世話までしてくれた。最初、私は監獄のそばの宿屋に泊っていた。初冬のころで、もうかなり寒いというのに、まだ蚊がたくさんいた。しまいには全身にフトンを引つかぶり、頭と顔は着物でくるみ、息をするために鼻の穴だけを出しておくことにした。この絶えず息が出ている場所へは、



日本留学時代の魯迅

蚊も食いつきようがないので、やつとゆっくり眠れた。食事も悪くなかった。だが、ある先生は、この宿屋が囚人の賄いを請負っているのです、そこに下宿しているのは適当でないといつて、しきりに勧告した。宿屋が囚人の賄いを兼業するのは私に関係のないことだと思つたが、好意もだしがたく、ほかに適当な下宿を探すより仕方なかつた。かくて別の家に引越した。監獄からは遠くなつたが、お蔭で喉へ通らぬ芋がらの汁を

毎日吸わせられた。

これより、多くの初対面の先生に会い、多くの新鮮な講義を聴くことができた。解剖学は、二人の教授の分担であった。最初は、骨学である。そのとき、はいつて来たのは、色の黒い、痩せた先生であった。八字ひげを生やし、眼鏡をかけ、大小とりどりの書物をひと抱(かか)えかかえていた。その書物を講壇の上へ置くなり、ゆるい、抑揚のひどい口調で、学生に向って自己紹介をはじめた――

「私が藤野嚴九郎というものでして……」

うしろの方で数人、どっと笑うものがあつた。つづいて彼は、解剖学の日本における發達の歴史を講義しはじめた。あの大小さまざまの書物は、最初から今日までの、この学問に関する著作であつた。はじめのころの数冊は、唐本仕立(とうほんしたて)であつた。中国の訳本の翻刻もあつた。彼らの新しい医学の翻訳と研究とは、中国に較べて、決して早くはない。うしろの方にいて笑つた連中は、前学年に落第して、原級に残つた学生であつた。在校すでに一年になり、各種の事情に通曉していた。そして新入生に向つて、それぞれの教授の來歴を説いてきかせた。それによると、この藤野先生は、服の着方が無頓着である。時にはネクタイすら忘れることがある。冬は古外套一枚で顫えている。一度など、汽車のなかで、車掌がてつきりスリと勘ちがいして、車内の旅客に用心をうながしたこともある。

彼らの話は、おそらくほんとうなのだろう。現に私は、彼がネクタイをせずに教室へ現れたのを、実際に一度見た。

一週間すぎて、たしか土曜日の日、彼は、助手に命じて私を呼ばせた。研究室へ行ってみると、彼は、人骨やら多くの単独の頭蓋骨やら——当時、彼は頭蓋骨の研究をしていて、のちに本校の雑誌に論文が一篇発表された——のあいだに坐っていた。

「私の講義は、筆記できますか」と彼は尋ねた。

「少しできます」

「持つてきて見せなさい」

私は、筆記したノートを差出した。彼は、受け取って、一、二日してから返してくれた。そして、今後毎週持つてきて見せるように、と言った。持ち帰って開いてみたとき、私はびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。私のノートは、はじめから終りまで、全部朱筆で添削してあった。多くの抜けた箇所が書き加えてあるばかりでなく、文法の誤りまで、一々訂正してあるのだ。かくて、それは彼の担任の学課、骨学、血管学、神経学が終るまで、ずっとつづけられた。

遺憾ながら、当時私は一向に不勉強であり、時にはわがままでさえあった。今でもおぼえているが、あるとき、藤野先生が私を研究室へ呼び寄せ、私のノートから一つの図をひろげて見せた。それは下膊の血管であった。彼はそれを指さしながら、おだやかに私に言った——

「ほら、君はこの血管の位置を少し変えたね——むろん、こうすれば比較的形がよくなるのは事実だ。だが、解剖図は美術ではない。実物がどうあるかということは、われわれは勝手に変えてはならんのだ。いまは僕が直してあげたから、今後、君は黒板に書いてある通りに書きたまえ」

だが私は、内心不満であった。口では承諾したが、心ではこう思った——「図はやはり僕の方がうまく書けています。実際の状態なら、むしろ、頭のなかに記憶していますよ」

学年試験が終わってから、私は東京へ行つて一夏遊んだ。秋のはじめに、また学校に戻つてみると、すでに成績が発表になっていた。百人あまりの同級生のなかで、私はまん中どころで、落第はせずに済んだ。こんどは、藤野先生の担任の学課は、解剖実習と局部解剖学とであった。

解剖実習がはじまつてたし一週間目ごろ、彼はまた私を呼んで、上機嫌で、例の抑揚のひどい口調でこう言った——

「ぼくは、中国人は靈魂を敬うときいていたので、君が屍体の解剖をいやがりはしないかと思つて、ずいぶん心配したよ。まずまず安心さ、そんなことがなくてね」

しかし彼は、たまに私を困らせることもあった。彼は、中国の女は纏足(てんそく)しているそうだが、くわしいことがわからない、と言つて、どんな風に纏足するのか、足の骨はどんな工合に畸形になるか、などと私にただし、それから嘆息して言った。「どうしても一度見ないと、わからないね、いったい、どんな風になるものか」

ある日、同級の学生会の幹事が、私の下宿へ来て、私のノートを見せてくれと言つた。取り出してやると、パラパラとめくつて見ただけで、持ち帰りはしなかった。彼らが帰るとすぐ、郵便配達が分厚い手紙を届けてきた。開いてみると、最初の文句は——

「汝悔い改めよ」

これは新約聖書の文句であろう。だが、最近、トルストイによって引用されたものだ。当時は

ちようど日露戦争のころであつた。ト翁は、ロシアと日本の皇帝にあてて書簡を寄せ、冒頭にこの一句を使った。日本の新聞は彼の不遜をなじり、愛国青年はいきり立った。しかし、実際は知らぬ間に彼の影響は早くから受けていたのである。この文句の次には、前学年の解剖学の試験問題は、藤野先生がノートに印をつけてくれたので、私にはあらかじめわかつていた、だから、こんないい成績が取れたのだ、という意味のことが書いてあつた。そして終りは、匿名だつた。

それで思い出したのは、二、三日前にこんな事件があつた。クラス会を開くというので、幹事が黒板に通知を書いたが、最後の一句は「全員漏レナク出席サレタシ」とあつて、その「漏」の字の横に圏点がつけてあつた。圏点はおかしいと、そのとき感じたが、別に気にもとめなかつた。その字が、私へのあてこすりであること、つまり、私が教員から問題を漏らしてもらつたことを諷していたのだと、いまはじめて気がついた。

私は、そのことをすぐに藤野先生に知らせた。私と仲のよかつた数人の同級生も、憤慨して、いっしょに幹事のところへ行つて、口実を設けてノートを検査した無礼を問責し、あわせて検査の結果を発表すべく要求した。結局、この流言は立消えになつた。すると、幹事は八方奔走して、例の匿名の手紙を回牧しようと試みた。最後に、私からこのトルストイ式の手紙を彼らの手へ戻して、ケリがついた。

中国は弱国である。したがつて中国人は当然、低能児である。点数が六十点以上あるのは自分の力ではない。彼らがこう疑つたのは、無理なかつたかもしれない。だが私は、つづいて中国人の銃殺を参観する運命にめぐりあつた。第二学年では、細菌学の授業が加わり、細菌の形態は、

すべて幻燈で見せることになっていた。一段落すんで、まだ放課の時間にならぬときは、時事の画片を映してみせた。むろん、日本がロシアと戦って勝っている場面ばかりであった。ところが、ひよっこり、中国人がそのなかにまじって現われた。ロシア軍のスパイを働いたかどで、日本軍に捕えられて銃殺される場面であった。取囲んで見物している群集も中国人であり、教室のなかには、まだひとり、私もいた。「萬歳！」彼らは、みな手を拍って歓声をあげた。

この歓声は、いつも一枚映すたびにあがったものだったが、私にとつては、このときの歓声は、特別に耳を刺した。その後、中国へ帰ってからも、犯人の銃殺をのんきに見物している人々を見たが、彼らはきまって、酒に酔ったように喝采する——ああ、もはや言うべき言葉はない。だが、このとき、この場所において、私の考えは変わったのだ。

第二学年の終りに、私は藤野先生を訪ねて、医学の勉強をやめたいこと、そしてこの仙台を去るつもりであることを告げた。彼の顔には、悲哀の色がうかんだように見えた。何か言いたそうであったが、ついに何も言い出さなかった。「私は生物学を習うつもりです。先生の教えてくださった学問は、やはり役に立ちます」実は私は、生物学を習う気などなかったのだが、彼がガツカリしているらしいので、慰めるつもりで嘘を言ったのである。

「医学のために教えた解剖学の類(たぐい)は、生物学には大して役に立つまい」彼は嘆息して言った。

出発の二、三日前、彼は私を家に呼んで、写真を一枚くれた。裏には「惜別」と二字書かれていた。そして、私の写真もくれるようにと希望した。あいにく私は、そのとき写真をとったのが

なかった。彼は、後日写したら送るように、また、時おり便りを書いて以後の状況を知らせるように、としきりに懇望した。

仙台を去って後、私は多年写真をつきなかつた。それに状況も思わしくなく、通知すれば彼を失望させるだけだと思うと、手紙を書く気にもなれなかつた。年月が過ぎるにつれて、今さら改まって書きにくくなり、そのため、たまに書きたいと思うことはあつても、容易に筆がとれなかつた。こうして、そのまま現在まで、ついに一通の手紙、一枚の写真も送らずにしまった。彼の方から見れば、去つてのち杳(よう)として消息がなかつたわけである。



藤野巖九郎が魯迅に送った写真

だが、なぜか知らぬが、私は今でもよく彼のことを思い出す。私が自分の師と仰ぐ人のなかで、彼はもつとも私を感激させ、私を励ましてくれたひとりである。よく私はこう考える。彼の私にたいする熱心な希望と、倦(う)まぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生れることを希望することである。大にしては学術のためであり、新しい医学の中国へ伝わることを希望することである。彼の性格は、私の眼中において、また心裡において、偉大である。彼の姓名を知る人は少いかもしれぬが。

彼が手を入れてくれたノートを、私は三冊の厚い本に綴じ、永久の記念にするつもりで、大切にしまっておいた。不幸にして七年前、引越しのときに、途中で本箱を一つこわし、そのなかの書籍を半数失った。あいにくこのノートも、失われたなかにあった。運送屋を督促して探させたが、返事もよこさなかった。ただ彼の写真だけは、今なお北京のわが寓居の東の壁に、机に面してかけてある。夜ごと、仕事に倦んでなまけたくなるとき、仰いで燈火のなかに、彼の黒い、痩せた、今にも抑揚のひどい口調で語り出しそうな顔を眺めやると、たちまちまた私は良心を発し、かつ勇気を加えられる。そこでタバコに一本火をつけ、再び「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである。

『莽原』第一卷第二三期、一九二六年一月一〇日

一九一九年十二月、魯迅は紹興から北京への引越しの際、荷物の一部を故郷の友人である張梓生に預けていた。後年、その中からこのノートも発見され、一九五六年に北京の魯迅博物館に寄贈された。一九九四年には、国家一级革命文物に指定されている。